

「源氏物語における『き』の用法」再論

吉 岡 曠

前置き

私は、昭和五十二年から五十四年にかけて、源氏物語の語りや語り手に関する一連の論文を発表した。最近、それらを集めて一書を編もうかという気持が動き出したので、拙論に対する反論を管見に入るかぎり読むように心がけている。その中で、糸井通浩氏の「源氏物語と助動詞『き』」（源氏物語探究会編『源氏物語の探究・第六輯』所収）は、論のほとんどを費やして拙論を批判検討してくださったもので、そういう御論にお答えをしないのは非礼にあたるし、批判の対象になった「源氏物語における『き』の用法」（吉岡編『源氏物語を中心とした論攷』所収）は、私の一連の論考の出発点でもあるので、いささか証文の出しおくれの感なきにしもあらずだが、ここで糸井氏の数々の疑問に対してできるかぎりのお答えをしておきたいと思う。ただし、糸井論文はかなりの長文でそのすべてを尽すわけにはいかないから、氏の疑問ないしは反論を私なりに整理し、三点にしばってお答えする。

一

「き」の用法は一般的に、たとえば「確実に過去に存在した事実を回想してのべる。口語で、『……た』といいか

えられる。助動詞「けり」と対照的に、話し手が自身で体験した事実を回想している場合が「おい」（『日本文法講座・『日本文法辞典』・明治書院）というふうには理解されている。私は「話し手が自身で体験した事実を回想している場合が「おい」という「き」の性質に着目し、地の文中の「き」は草子地認定のメルクマールの一つとして利用することができ、のではないか、ひいては地の文中の「き」を手がかりに、語り手がどういう事柄を直接に体験することができるのではないかと見当をつけた。そういう見込みのもとに、源氏物語の「き」の全用例について、「話し手自身が体験した事実を回想している場合」がどの程度に「おい」のかを調査したのが「源氏物語における『き』の用法」である。調査に当っては次のような方針を立てた。

一 用法の分類を目的とし、「本義」その他にわたらない。

二 調査範囲は源氏物語に限定する。

三 源氏物語の全用例を対象とする。

四 会話・心内語・和歌・消息文の用例と地の文の用例とを別々に考察する。

その結果は、会話文・心内語等の場合は全用例一九三〇例中一九〇八例（九十九%弱）まで、何の疑問もなく話し手の直接体験した事柄の回想とみなしうるものだった。地の文の場合は地の文というものの性格上少々複雑で、くわしいことは当該論文を読んでいただくほかはないが、全用例九五二例中八九〇例（九十三・五%弱）まで、話し手の直接体験の回想とみなしてさしつかえないものだった。

さて、糸井論文についてまずとりあげなければならないのは、氏が「吉岡分析に対する疑問の根本」といわれる、吉岡は「用法の分類を目的とし『本義』その他にわたらない」といっておきながら、事実上体験の回想を「き」の本義とみなしているのではないかという疑義である。少し長いが当該箇所を全文を引用してみよう。

さて、吉岡氏は、既述したように、地の文中の「き」を分類した第二に「物語上すでに語られた事柄の回想」（つまり、先行記事をふまえた用法で、「吉岡は」文章語である故の特殊用法という）を特定されているのであ

るが、しかし^①「この用法は『き』の用法としては明らかに本来的なものではない」という。さらに、日常語である会話文中の助動詞「き」にこそ「き」の本来の用法がみられるとし、その会話文中の助動詞「き」の十九%弱が体験の回想であることから、最近の文法学者の一般的な理解、^②「確実に存在したと思われる過去の事実の回想が原義で、目睹回想は、確かな過去の事実ということの故に、いきおい自己の体験、直接の見聞であることが多いという意味で第二義的要素である」という理解に対して、^③「目睹回想の用法が単に多いのではなく、圧倒的に多いと判断すべきだと指摘し、この目睹回想の用法であるかどうかで、『き』の各用法が『本来的』であるかないかを判断されているようである。しかし、吉岡氏は「き」「けり」の全用例を整理されるにあたっての基本方針の第一項に「用法の分類を目的とし『本義』その他にわたらない」とされているが、『本義』が吉岡氏のいう「本来(的用法)」とどう概念が異なるのか明確ではないが、目睹回想を本来的用法とみ、それを分類の基準にされている態度には「本義」にわたらないという方針と矛盾するのではないだろうか。又、「私に必要なのは……『本義』ではなく、源氏物語における用法であり……」ともいわれる。^④しかし、目睹(体験)回想を「き」の「本義」とされているといってもよいのであり、ここにみられる矛盾ないしはあいまいさが、私の吉岡分析に対する疑問の根本といつてよい(二三〇頁)。

氏は右の文中で、吉岡が目睹(体験)回想を「き」の本義ないしは本来的用法であると見ているとくり返し強調しているが(ロ・ハ・ニ)、これは私にとってはまことに理解に苦しむ指摘といわなければならない。私はたしかに体験の回想であるか否かを「分類の基準」にしたが、先にものべたように、それは、「き」が体験の回想であるケースがどの程度に多いか少いかを検証することがこの論のそもそもの目的であつたからで、「目睹回想を本来的用法とみ」たからではさらさらない(ハ)。私はたしかに会話文等の「き」を検討した章を、「口頭語に用いられた、つまり当時のもっとも普通の用法としては、単に『話し手が自身で体験した事実を回想している場合がおおい』のではなく、圧倒的におおいことを確認して、この章を終る」と結んでいるが、九十九%弱が体験の回想であるという事実を事実としてのべただけで、数が多いから本来的用法などとはどこでも一言もいっていないし、そもそも「『き』

の各用法が『本来的』であるかないか（傍点筆者）ということなどには私の論文は全く觸れていないのである（ロ）。

私は地の文中の「き」を次の四グループに大別した。（ことわっておくが、これは用法を基準にした分類ではなく、結果として第二グループが特殊用法のグループとなったまでである）。

- (一) 体験話法的文脈の中に用いられた「き」（作中人物の立場からの作中人物の体験の回想（三九七例））
 - (二) 先行記事を受ける特殊用法の「き」（二五八例）
 - (三) 語り手の立場からの語り手の体験の回想とみなされる「き」（二三五例）
 - (四) 語り手の体験の回想とはみなされないという意味で例外的な「き」（六二例）
- 第二項の特殊用法の「き」というのはたとえ次のようなものである（括弧内が先行記事）。

宣ひしもしるく、十六夜の月をかしき程に〔末摘花邸に〕おはしたり（角川文庫・二・二二・四）（この頃の朧月夜に忍びて物せむ。まかんでよ）。

少納言（源氏が紫上を二条院に連れ出すのを）とどめ聞えむ方なれば、よべ縫ひし御衣ども引きさげて、自らもよろしききぬ着かへて乗りぬ（一・一九〇・四）（少納言は）言少なに言ひて、〔惟光を〕をさをさあへしらはず。物縫ひいとなむけはひなどしるければ、参りぬ）。

須磨には、年かへりて日ながくつれづれなるに、植ゑし若木の桜ほのかに咲きそめて（三・五九・五）（水深うやりなし、植木どもなどして、今はとしづまり給ふこゝち、うつゝならず）。

この種の「き」が二五八例にも達したので、先行記事を受ける特殊用法の「き」として特定したのだが、そのことの当否は別として、糸井氏が吉岡は体験の回想を「き」の本義と考えていると判断される根拠は、あげて、私が右の第二項の「き」について、「第二グループの『き』は『き』の用法としては明らかに本来的なものではないから云々」（A）とのべたことと、会話文等と地の文とを別途に処理する理由として、「当時の日本語は何よりもまず話しことばであり、文章語はごく特殊な言語領域であつたろうこと、したがって普通の典型的な用法は話しことばの中に見

出されるはずで、文章語の中には文章語であるがゆえの特殊相も存在する可能性があること云々」(B)とのべたことに基いているようだ(イ)。しかし、先の分類の第一グループと第二グループはBの予想が的中したものであり、Aの「明らかに本来のものではないから云々」が「明らかに文章語であるがゆえの特殊相だから」の意であることは、ABを読み合わせて、かつ第二グループの内容を検討していただければ自明だといってよいだろう。くり返しているが、私は会話文等にはあらわれるはずのない(事実一例もあらわれない)第二グループの「き」について「本来的な用法ではない」といったので、「き」の各用法が『本来的』であるかないかを判断する(ロ)ことなどはまったくしていないし、する気もなかった。

先にもいったように、私の一連の論考は草子地の判別とその性格の把握、あるいは語り手の素性の明確化ということが本来の目的で、「き」「けり」の調査はそのための手段だった。従って、「き」による回想の対象が話し手の体験内の事柄であることが多いという現象が、会話文等の場合には圧倒的に多く、その現象は当然地の文にも反映するはずであり、事実反映していることを確認できれば事足りたので、体験の回想という用法が「き」の第一義的用法が副次的用法(現象といいかえてもよい)かということとは、いわばどうでもよいことだった。現に私は「き」についての先学の所説を整理して次のようにのべている。

要するに、確実に存在したと思われる過去の事実の回想、ないしは確かな記憶の表現というのが原義で、目睹回想は、確かな過去の事実というのはいきおい自己の体験、直接の見聞であることが多いという意味で、第二義的要素であるということのようである。

さらにいえば、「き」は現在でもなければ未来でもない、過去の事柄に関わる助動詞だから、その事柄が過去の事柄であることを示すのが第一義的用法であろうことも容易に考えられるところである。また「けり」との対応からいって、「けり」が「来有り」という語源に基いて過去から現在まで継続している事象の認識をあらわすとすれば、「き」が過去において完結し、現在からは切り離された事象の認識に用いられることも、用例の検討を通して認められることである。従って私は、糸井氏が和歌の用例を対象にして、たとえば「あるものごとの、A時のA状態と

B時のB状態とが異質なものと認識されるとき、B時を基点にしてA時をB時から切り離して（つまり「過去時」として）認識されていることを示す助動詞が「き」であつた（一三四頁）と「き」の機能を抽出されたのを、それが「き」の本義ないしは第一義的用法か否かはともかくとして、そういう機能が「き」にあることを認めるのにやぶさかではない。しかし、同時に、氏が対象とした和歌の用例のすべてが詠者の体験の回想であること、源氏物語の会話文等の用例の九十九%弱までが話者の体験の回想であることも、私にとっては大切な現象である。こと現象の分類に関しては万遺漏なきを期したつもりで、源氏物語の「き」の全用例を調査対象としたのもそのためであり、「過去の事実についての相手の体験を問う場合に用いる」（『時代別国語大辞典・上代篇』）という解釈で処理できるものもふくめて、いささかでも不審のある用例はすべて「例外」の項目に入れたのもそのためである。

注 前稿では数えちがいがあつたらしく、これは訂正した数字である。

二

糸井論文について二番目にとりあげなければならないのは草子地の認定に関わる問題である。私は先の四分類のうちの第三グループ「語り手の立場からの語り手の体験の回想とみなされる『き』（二三五例）」を、さらに次のように下位分類した。

A 語り手を単に光源氏側近の女房と漠然と想定して、そういう語り手の体験の回想であることがほぼ確かな「き」（一六一例）

B 伝聞した事柄ではあつても、語り手が確かだと確信しうる事柄について用いられた「き」（三七例）

C 語り手の経歴・地位等がもう少し具体的につきとめられれば、そういう語り手の体験の回想としてAグループに入りうる「き」。あるいは逆に、これらの「き」を語り手の体験の回想と仮定することで、語り手の経歴・地位等をさらに具体的に把握する材料となりうる「き」（三七例）

そして、右のAグループについて、この二二・文・一六一例は相互に本質的なちがいはなく、すべて「作者と思われるものが物語の表面に出て直接発言している部分」（中野幸一氏定義）、すなわち草子地と認めてしかるべきだと思う、とのべた。

それに対して糸井氏は、この一六一例の中には草子地のなかで用いられている「き」も少数ながらあるが、地の文中の「き」のほとんどはそうではないとして、次のようにいう。

私は、夕顔末尾の「き」と、例(11)(12)の「き」とには「本質的なちがひ」があると考える。すでに竹岡氏が指摘されているように、助動詞「き」で過去時のことが認識される基準の「現在」には二つあるのである。竹岡氏のことを借りれば、それが「物語中の現場」の現在と「言語主体の現場」の現在とである。夕顔末尾の「き」は後者の現在を基準にして過去事が認識されているものであり、例(11)(12)等、地の文中のほとんどの「き」は前者の現在を基準にして過去事と認識されているものである。草子地を仮に「語りについて語る語り手の詞だ」とすれば、夕顔末尾は草子地と認められても、例(11)(12)等の多くの「き」を含む文については、少くとも助動詞「き」のみを根拠にして草子地とは認められない。少なくとも、この両者のちがひは「本質的なちがひ」であり、草子地認定においても、そのレベルの相違を無視することはできないと考えるのである。

「夕顔末尾の『き』』というのは次の例1であり、「例(11)(12)」というのは次の例2・例3である。

1 かやうのくたくしき事は、あながちに隠ろへ忍び給ひしも、いとほしくて、皆もらしとどめたるを、……と作り事めきてとりなす人、ものし給ひければなむ。あまり物言ひさがなき罪、さりどころなく(二・一五〇)。

2 七月にぞ后居給ふめりし。

3 斎宮は、こそうちに入り給ふばかりしを、さまざまはることありて、この秋入り給ふ(二・一〇三)。

しかし、1を「言語主体の現場」の現在からの回想、2・3を「物語中の現場」の現在からの回想として、その間に「本質的なちがひ」を認める理論的・実際の根拠がはたしてあるのだろうか。糸井氏の所説についてまず指摘しなければならないのは、傍線の箇所、竹岡論文の、微妙なしかし重大な読みちがひがあることである。竹岡氏の関連論文には、「助動詞『けり』の本義と機能」(『言語と文芸』三十一号)と『けり』と『き』との意味・用法」(『月刊文法』第二巻・第七号)の二種があるが、執筆筆が新しく、しかも前者の所説を訂正した箇所が認められる後者を

主な対象として（糸井氏も注6で「主として後者による」とことわっている）、その読みちがいを洗い出してみよう。

竹岡氏は「けり」の意味・用法を「二」「物語地の文における『けり』」と「二」「会話・心中詞、和歌、随筆、日記における『けり』」に大別して考察し、前者の意味・用法を三類に、後者のそれを五類に分類して整理している。竹岡氏が「物語中の現場」というのはたとえ次のようなものである。

1 急ぎ参らせて御覧するに、めづらかなるちこの御かたちなり。一のみこは右大臣の女御の御はらにて、寄せ重く、疑ひなき儲けの君と、世にもてかしづき聞ゆれど、この御にほひには並び給ふべくもあらざりければ、おほかたのやむごとなき御思ひにて、この君をば、わたくしものにおもほしかしづき給ふ事かぎりなし（二・二六頁）。

2 かけがねを試みに引きあげ給へれば、あなたよりは鎖さざりけり（一・八二頁）。

傍線のない部分がそれぞれの「物語中の現場」で、1の傍線部が「物語中の現場」から空間的に「あなたなる場」の事象を（「二」の一類）、2の傍線部が時間的に「あなたなる場」の事象を（「二」の二類）「けり」で認識した部分である。

ところで竹岡氏は右の「二」一・二類の「けり」を次のように定義している。

A この種の「けり」は、空間的にも、時間的にも、物語中の現場からは別世界での事象を、言語主体が「あなたなる」世界における事象として認識していることを表わす語である（五〇頁）。

そして「二」の「会話・心中詞、和歌、随筆、日記における『けり』」の一類については次のように定義している（五三頁）。

B 物語地の文の場合の1・2（右の一・二類、筆者注）と同じで、言語主体の現場から、空間的または時間的に、あなたなる世界における事象として認識していることを表わす「けり」である。

「物語地の文の場合の1・2と同じで」というのは「意味・用法は同じで」の意であろうから、後者は前者の表現に合わせて次のようにいえることが可能だろう。

C この種の「けり」は、空間的にも、時間的にも、言語主体の現場からは別世界での事象を、言語主体が「あなとなる」世界における事象として認識していることを表わす語である。

AとCとの唯一のちがいは傍線部だが、なぜこういうちがいが生ずるのか。いうまでもなく会話・心内詞、和歌、随筆、日記等のジャンルには「物語中の現場」なるものは存在する余地がないと、氏が判断したからだろう（上記のうち随筆、日記には「物語中の現場」に相当するものが認められることは後述する）。つまり竹岡氏は、物語の地の文とはジャンル・性格を異にする会話・心内詞等々では、「物語中の現場」は「言語主体の現場」に当たるといつているのであって、物語の地の文中に二つの「現在」が同居しているなどということはどこでもいつていないし、そういう認識ももっていない。

しかし、ここから話が少々微妙になるのだが、竹岡氏は「二」の第三類として次のような「けり」の用法を指摘している。

1 （定子中宮が）「円融院の御時に、『草子に歌ひとつ書け』と殿上人に仰せられければ、いみじう書きにくうすまひ申す人々ありけるに、『さらにたゞ手のあしきよき、歌の折にあはざらんもしらじ』と仰せらるれば、わびてみな書きける中に、たゞいまの関白殿、三位の中將ときこえけるとき、『しほのみつ云々』といふ歌の末を『たのむはやわが』と書き給へりけるをなんいみじうめでさせ給ひける」など仰せらるゝにも、すすろに汗あゆる心地ぞする（枕草子・二〇段）。

2 いづれのおほん時にか、女御更衣あまた侍ひ給ひけるなかに、いとやむごとなききははあらぬが、すぐれて時めき給ふ、ありけり（二・二五）。

3 光る君といふ名は、こまうどのめで聞えて、つけ奉りける、とぞ言ひ伝へたる、となむ（一・四九）。

23は、各帖の冒頭・結末の部分に用いられる「けり」で、このたぐいは「さらに、一段中の小段落の切れ目」にも用いられるとして、

4 その宣命読むなむ、かなしき事なりける。……いまひときざみの位をだにと、おくらせ給ふなりけり（一・三

〇。

5 人のみかのためしまで引き出で、さ、めき嘆きけり（一・三九）。

などが引例されている。

竹岡氏はこれらの「けり」について、「これは物語者が物語口調を表面に出して、物語の世界での事象として叙述しているのである」と、やや曖昧な説明をしているが、1は随筆中の、しかも会話文中の「けり」であり、2以下も、物語全体を「あなたなる」世界として認識する視点の位置は当然物語の内部ではなく外部のはずだから、いずれも言語主体の現場、いかえれば語りの現場からの認識を表わす「けり」として処理すべきものだろう。現に、竹岡氏自身先行の「助動詞『けり』の本義と機能」では、1と同じ枕草子の例を図式化して説明した箇所で、「話手（聞手）・作者（読者）の現場」（七頁）という表現を使っている。それが後続の論文では「物語口調を表面に出しての叙述」というふうにかわっているわけで、私が先に、前の論文を後の論文で訂正した箇所があると指摘したのはこの点である。

ところで、右の第三類のような「けり」が見出されると、源氏物語の地の文には糸井氏のいう二つの現在（視点）が混在していることになるのだろうか。私はならないと思う。問題は竹岡氏が右のような訂正をほどこした理由であり、その理由は前論文の次のような一節が明白に物語っている。

これらも（枕草子・二〇段の例文中の「けり」、筆者注）すべて作者清少納言が現在自分の記している「現場」、あるいは中宮の話を現に聞いている「現場」からはかけ隔った「あなたなる」世界での事象として認識し物語っているのである（七頁）。

私は（仮に「あなた」説の立場に立っていえば）、前掲の例文1の「けり」は、「（作者清少納言）」ではなく中宮が、「ただ今の関白殿」の逸話を、自らが語っている現場から「あなたなる」世界の事象として認識した「けり」というべきだと思うが、それはともかくとして、右の一節で竹岡氏は、この例文における清少納言の視点が、「現在自分の記している『現場』」に据えられているのか、「中宮の話を現に聞いている『現場』」に据えられているのか、明らかに

判断に迷っている。後者は「……など仰せらるゝにも、すずろに汗あゆる心地ぞする」と現在形で叙述されている部分で、源氏物語の地の文に移していえば「物語中の現場」に当り、前者が「言語主体の現場」に当る。つまり、竹岡氏は第三類の「けり」が（地の文中のすべての「けり」が、といつてもよい）「物語中の現場」を視点とする「けり」なのか、「言語主体の現場」を視点とする「けり」なのか、判断不能と判断した、それが「物語口調」という、氏にすればおそらく不本意な訂正の理由であろう。以上のことは「地の文中のほとんどの『き』（糸井・前掲引用文）」についてもそのまま当てはまるのである。

糸井氏の誤読の原因について、おそらく二つのことが指摘できるだろう。一つは、竹岡氏が「物語中の現場からは別世界での事象を、言語主体が『あなたなる』世界における事象として認識していることを表わす語」、あるいは「言語主体の現場からは別世界での事象を、言語主体が『あなたなる』世界における事象として認識していることを表わす語」（圈点竹岡、傍線吉岡）と、注意深い表現でのべていることを糸井氏が軽視していることである。つまり、どちらの「けり」も言語主体の認識をあらわしていることには変りがないし、草子地中の「き」も、その他の「地の文中のほとんどの『き』も言語主体（語り手）の認識をあらわしていることには変りがない。このことが両者の判別を困難にしている基本的な理由でもある。二つ目に、竹岡氏が「物語中の現場」としかいつていないことを、「物語中の現場」の現在」と不用意に、あるいは故意にいいかえたことである。「物語中の現場」というのは現在形で語っている部分ということで、事柄は本質的には語り方・話法の問題であつて、視点の問題ではない。いいかえによって、話法の問題が視点の問題にすりかわつたわけだが、視点といふことを問題にするとすれば、「物語中の現場の現在」というのは架空の時間であり、視点である。そして、現在話法で語られている「物語中の現場」も、「言語主体（語り手）の現場」という唯一の現実の視点から認識され、語られている世界であることにはかわりがないのである。「この種の『けり』は、空間的にも、時間的にも、物語中の現場からは別世界での事象を、言語主体が『あなたなる』世界における事象として認識していることを表わす」という竹岡氏の定義には、そもそも認識の視点、ないしは時点という要素はふくまれていない。しかし、仮に「言語主体が『あなたなる』世界における事象と

して認識している」視点はどこなのかと問うならば、「言語主体の現場」であるとしか答えようがないのではないだろうか。

右に指摘した二点は、私が「物語中の現場の現在」という視点は存在しない、従って、草子地であることが明らかな文中に使用された「き」と地の文のその他の「き」とを区別するいわれはない、両者の間に本質的なちがいはないと考え、いわば理論的な根拠だが、もう一つだけつけ加えておこう。糸井氏はたとえば、

御子たちは、東宮をおき奉りて、女宮たちなむ四所おはしませしける。その中に、藤壺と聞えしは、先帝の源氏にぞおはしませしける。まだ坊と聞えさせし時参り給ひて、高き位にも定まり給ふべかりし人の、とり立てたる御後見もおはせず、母方もその筋となく物はかなき更衣腹にて物し給ひければ……（六・一五頁）

という若菜上巻の冒頭の一節を引いて、次のようにいう。

この例文の場合少々複雑であるが、進行中の物語現場については、語り手の現在からみて「けり」で認識されるが、その物語中の現場からみてその時点から隔絶した時のこととして認識しなければならないときに、そういう隔絶した時のことを「き」で認識している。そういう「き」「けり」の使い分けであることにはやはり変わらないのである（二二八頁）。

しかし、藤壺女御の経歴を叙述するという同一内容の一節の中で、あるいは一節を構成する各文の中で、叙述のよって立つ基盤である視点が、猫の目のようにくるくる変わるといことが実際にありうるのだろうか。その変化に読者はついていけるのだろうか。文としての統一性はこういうことになってしまふのだろうか。以上が糸井氏の「二つの現在（視点）」説に対する、私のいわば実際問題としての疑問である。

三

糸井論文について三番目にとりあげなければならないのは、糸井氏のいう「き」の本義がはたして本義として認められるか否かということである。しかしその前に、もう少し前章の問題にこだわってみよう。

糸井氏はたとえば先の若菜上巻冒頭の例文について、「けり」の使用された部分が語り手の現場からの認識、「き」の使用された部分が物語中の現場からの認識とするわけだが、どうしてそういうことになるのか首をひねらざるをえないようなことについて、裏付けや説明は一切なされていない。また、草子地中の「き」が語り手の現場からの認識、その他の「地の文中のほとんどの『き』」が物語中の現場からの認識ということについても、私が氏の論文を精読してかろうじてこれがその根拠かと見当をつけえたのは、驚くべきことに次の一言及（傍線部㊹）のみである。

例(13) はじめよりおしなべてのうへ宮づかへし給ふべききはあらざりき。おばえいとやむごとなく、じやうずめかしけれど、わりなくまつはさせ給ふあまりに、……など、あながちにおまへ去らずもてなさせ給ひしほどに、おのづからかろきかたにも見えしを、このみこ生まれ給ひてのちは、いと心ことに思ほしおきてたれば、坊にもようせずは、この御子のみ給ふべきなめりと……（桐壺）

例(14) 齋院は、御ぶくにており居給ひにしかば、朝顔の姫君は、かはりに居給ひにき（賢木）

①これらの文末の「き」は、物語中の現場の現在を前提にしてそれとは異質な状態の時を過去として切り離して認識していることを意味する。この種の文末の「き」は大和物語などにはみられなかった例で、源氏物語が獲得した表現であったといつてよい。例(13)の物語中の現場が「このみこ生まれ給ひてのち」の現在であることは文脈から明らかなことである。例(14)の場合も基本的には同じであり、物語中の現場の現在からすればすでに過去のことであり、それらの過去のことが、現在とはすでに異質な状態として認識されねばならなくなったことがらであることを意味している。先の例(10)の須磨の場合も、物語中の現場を現在とする過去時の認識とみるべきものかも知れない（二二五頁）。

傍線部①㊹のような断定は論文中の随所でくりかえされるが、その裏付けとおぼしきものが傍線部㊹の言及のみだということは驚くべきことではないだろうか。「例(13)の物語中の現場が『このみこ生まれ給ひてのち』の現在であることは」いうまでもない。しかし、だからといって、例(13)で使用された「き」が自動的にその現場からの回想の「き」だということにならないことは、前章で縷述した通りである。

「現在時が、過去時とは異質な状態にあること、又、そういう過去時から現在時へと変化したそのこと自体を意識し、それを表出したかった現語主体の認識」(二六頁)、あるいは「その現在とは異質な時間における事実であることを指摘し、はっきり別の時点のことであることを示して現在時と対立的に認識したい気持ちを示そうとしている」(二二八頁)等々、糸井氏がくり返し断定する「き」の本義に私が疑問を抱かざるをえないのも、用例の具体的な分析を通してはじめて明らかにされるはずの、その根拠がまったく示されていないからである。氏の「古代和歌における助動詞『き』の表現性」においては、「現在の状態(心)とは異質な状態(心)を時間的に過去として切り離して認識する」(二〇八頁)という「き」の機能ないしは表現性が、一々の和歌に即して作品論的に説明されている。しかし、どういうわけか源氏物語の用例については、断定のくり返しがあるばかりで、その種の説明がまったく見当たらないのである。

「き」が過去の事柄に関わる助動詞であり、その事柄が過去において完結した事柄であることはすべての「き」に認められる共通性だから、氏の定義で問題になるのは、過去が現在から「異質な状態として」「対立的に」とえられるという部分である。先の引用文中の例でいえば、

例(13) はじめよりおしなべてのうへ宮づかへし給ふべきにはあらざりき。

例(14) 齋院は、御ぶくにており居給ひにしかば、朝顔の姫君は、かはりに居給ひにき。

の、「桐壺更衣がもとと普通の上宮仕えをするような身分ではなかったこと」や、「齋院が辞任して朝顔の姫君がかわりに就任したこと」は、物語中の現場と具体的にどのような異質な状態であり、どのように対立しているのだろうか。また、「異質」ととらえ、「対立」と認識することが、それぞれの文脈中でのどのような意味ないしは表現性をもつのだろうか。そのところを糸井氏は説明する必要があると思うし、少くとも、説明してもらわなければ私にはわからない。

ことばというのは生きものであり、時代の変遷とともに語源的な意味からさまざまな用法が派生し、古い用法がすたれて新しい用法がもつばら幅をきかすことが往々にしてあることも、われわれがほとんどすべてのことばに

ついで観察するところである。助動詞「き」の語源はさしあたって不明としておくほかはないから、本義という言葉を用いるのはためらわれるが、私は「き」の第一義的用法が完結した過去の事柄の回想であって、確実に存在した事柄の回想、あるいは自己の体験した事柄の回想といった用法ないしは現象が、付随的用法ないしは現象であることを認めるのにやぶさかではない。しかし、付随的現象であっても、付随する確率が高まるにつれて、現象が機能ないしは用法として意識される段階が必ずやあったはずであり、「き」の体験した事柄の回想、「けり」の伝聞した事柄の回想という用法が、源氏物語の時代にすでに用法として確立していたことは、次のような「き」と「けり」の使い分けの諸例が明白に物語っていると思う。

(夕顔が)かうのどけきにおだしくて、久しくまからざりし頃、この見給ふるあたりより、情なくうたであることをなむ、さるたよりありて、かすめ言はせたりける、のちにこそ聞き侍りしか(常木、一・七〇、頭中将詞)。

(五条の乳母が)いまはのきざみにつらしと思はむ、と思う給へてまかれりしに、その家なりける下人の病しけるが、俄に出であへでなくなりけるを、おち憚りて、日を暮してなむ取り出で侍りけるを、聞きつけ侍りしかば……(夕顔、一・一三四、源氏詞)。

さいつごろ(明石へ)まかりくだりて侍りしついでに、ありさま見給へに寄りて侍りしかば、(明石入道は)京にてこそ所えぬやうなりけれ、そこらはるかに、いかめしう占めてつくれるさま、さは言へど、国のつかさにてしおきける、ことなれば、残りのよはひゆたかにふべき心がまへも二なくしたりけり(若紫、一・一五四頁、良清詞)。

付記 鈴木泰氏の「『き』『けり』の意味とその学説史」(武蔵大学『人文学会雑誌』第16巻、第3・4号)にも拙論への批判が見えるが、本稿は部分的に鈴木論文への間接的な解答にもなっていると考ええる。